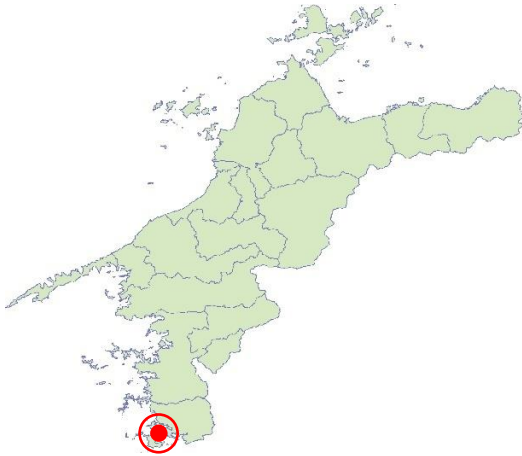




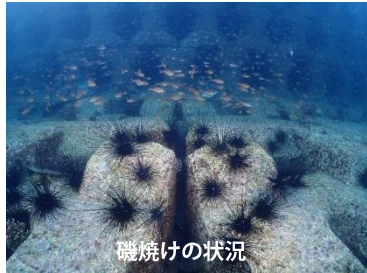
地域概要

愛南地区は、愛媛県の南部に位置する太平洋に面した温暖な地域である。地域の主な産業は水産業で、まき網、一本釣り、刺し網、遊漁船、渡船、養殖業ではマダイやブリ、真珠、マガキなどが行われている。また、リアス式の地形を有しており、沿岸にはホンダワラやヒロメなどの大型の藻類が繁茂する豊かな藻場が存在していた。



しかし、近年磯焼けの状況がみられるようになり、2018年頃からは、藻場が殆どみられないほど厳しい状況が続いている。また、藻場の消失に伴い、魚類や貝類（タカセガイなど）、藻類（ヒジキ、テングサ、トサカノリなど）といった磯根資源が大きく減少しており、漁業への影響が懸念されている。

磯焼けの原因としては、植食性の生物として、ガンガゼ、ナガウニ、ムラサキウニなどのウニ類が多くみられ、また、ブダイやイスズミ、アイゴなどの植食性魚類も大型で周年確認されている。このことから、藻場は一年を通して、これらの食害を受けて磯焼けが一層進行しているものと考えられる。



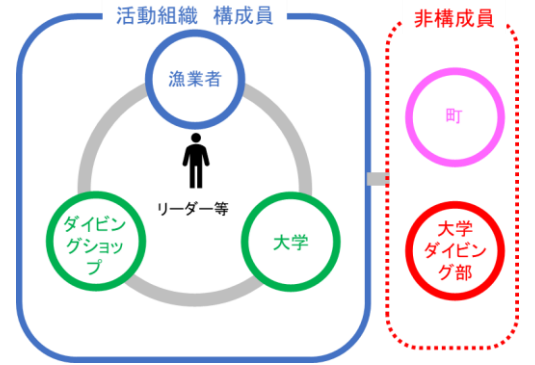
連携の経緯

当該地域では漁獲資源の減少や磯焼けが進んでいたが、対策を行うにも漁業者の高齢化による漁業の衰退など、人手の確保等も含め課題となっていた。そこで、大学の研究及び町の水産振興の一環として、磯焼け対策の実証試験として、ガンガゼ等のウニ類の利活用も含めた藻場保全の取り組みを町により2018年から開始した。2023年からはこの取り組みの充実を図るために水産多面的発揮対策事業により、ウニの駆除及び母藻・種苗設置を行っている。

連携体制づくり

本取組は漁業者を中心として大学、ダイビングショップ、町、大学ダイビング部などの関係者の協力の下、技術的・人的なサポートを受けつつ、活動を行っている。愛媛大学との連携のきっかけは、大学の研究施設である南予研究センター船越ステーション（通称：船越ST）が、愛南町役場西海支所（旧西海町役場）の2階に、2008年に設立されたことも大きく影響している。愛南町は水産業が大きな産業の一つであるため、愛媛大学は水産の研究機関として町との連携体制をしっかりと築いて

きたこともある。更に、愛南町ではマリレジャーが盛んに行われており、安全性の確保や環境の保全の観点から、ダイビングショップも構成員となっているのも特徴である。また、ダイビングショップの協力もあり、今年度は大学のダイビング部にも協力を得られる体制となった。



主体	各主体の役割
漁業者	保全活動における作業全般。
大学	保全活動の技術支援・情報共有。
ダイビングショップ	保全活動における作業全般。
愛媛大学ダイビング部	カンガゼ駆除作業。
町	保全活動における作業及び技術支援。

連携による取組内容

この地区で行われている水産多面的における藻場の回復・維持の活動は、町と愛媛大学が連携して取り組みを行っているため、藻場回復の研究成果も含め、当該地域に合わせた手法を模索しつつ、多面的とは異なる取り組みとも連携しながら行われている。藻場回復の手法は、ガンガゼ等のウニ類の駆除（食害の防止）を主とし、母藻及び種苗の投入による藻場回復を促進する手法も取り入れている。活動の内容としては、ウニ類駆除を基本とし、その成果を把握し、その後の活動方針を検討するため、充実したモニタリング調査を実施している。

また、一方で多面的の活動とは異なる取り組みではあるが、当初から行っているウニ（カンガゼ）の食用化試験も大学と町の取組として継続して行われており、町の新たな所得増大の機会として注目を集めている。

連携の効果と今後の方針

取組においては、漁業者の高齢化や人口の減少により、地域内の人員のみで全ての取組を行うことが難しい状況がみられる。しかし、以前から藻場の保全活動に積極的に取り組んでいる町や大学との連携により、人手不足の地域でも充実した取組が実施できている。また、今年度から愛媛大学のダイビング部がカンガゼ駆除のサポートとして取り組みに参加しており、こういった広がりが今後も期待される。

課題としては、現在取組参加者が少なく充実した取組の継続には、新たに参加者を増やす必要がある。そのため、すでに連携している愛媛大学の学生や県内の他大学との連携、また、現在町で推進している海業の取組なども連携し、より安定した活動へと繋げることも考えられる。

